
百戦錬磨の負け男

緑の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百戦錬磨の負け男

【Nコード】

N6451Y

【作者名】

緑の人

【あらすじ】

よくある話だ。

異世界に転生して、バランス崩壊のチート能力をもらい、美少女たちにその勇士を余すところなく見せつけ、悪事を働く者をごく叩き伏せる――。

そういう物語の主人公になったはずなのに、どうして俺はまた負けてるんだろう。

ブローグ

はっと気がつくと、そこは学校だった。

ありふれた黒板に、並べられた机と椅子。

窓から外を見れば整地されたグラウンドがある。

グラウンドの傍には体育館、そしてプールが備わっている。

どこをどう見ても、誰もが思い描くまさに『学校』だった。

ありふれた風景のはずなのに、同時にどこか異質な印象を受けた。

誰も人がいないからだろうか？教室を見渡しても、グラウンドを見渡しても、人の姿も声も——気配すらもない。

「あ………れ？」

知らずに疑問符が口から漏れる。

異質なのは場所だけではなかった。

なぜなら、どうして自分がこんなところに居るのが分からないから。

ここが学校であることは明白だ。問題は、この学校に全く見覚えが無いこと。

それどころか、ここに来るまでの過程の記憶がごっそりと抜け落ちていた。

やかましい目覚ましに起こされ、出来合いの朝食を食べ、時間に追われながら身支度を整え、友達と一緒に登校する——そんなありふれた記憶が、ない。

昨日の記憶も、

一昨日の記憶も、

一昨々日の記憶も、

一切、無い。

忘れるはずのない自分の名前さえもわからない。

「記憶喪失……ってやつか？」

確認するように呟く。

不安げに自分の掌を見つめる。

「呑気なものだな」

「!？」

返ってくるはずのない返事に、彼は驚いて声のした方を振り向く。

「よっ」

つい十秒前にいなかったはずの男が、あたかもずっと居ました、と言わんばかりの体でそこに居た。

二十歳くらいの男だ。黒髪黒目で体の線は細い。が、鋭い双眸が『優男』という言葉を限りなく似合わないものにしていた。

男は、何故か喪服に身を包んで机の縁に腰かけていた。

気軽に話しかけてくるが、面識はもちろんない。

探るべき記憶が無いのだから、彼からすれば誰であっても初対面だ。

「誰……？」

短く簡潔に一言で問う。

男は唇の端を歪めて答える。

「お前の『これから』についての案内人、といったところだ」

「『これから』……？」

机から降り、男は胸の前で十字を切る仕草をする。

「まずはお悔やみ申し上げようか。災難だったな？」

「は？」

話の意図が掴めず混乱する。

そんな彼に、男は言葉を放った。

この不可解な状況を一発で理解させてくれるような、魔法の言葉。

「お前は死んだんだよ」

何の変鉄もない交通事故だった。

道端に飛び出した小さな子供を庇って車に跳ねられた。

法定速度を遥かに超過した鉄の塊はあっさりと彼を弾き飛ばし、数メートル先の壁に衝突させた。

医者が出る幕もない、完全な即死だった。

「死んだ……俺、が？」

「簡潔に事実だけを述べるとそうだ。理解したか？」

「それじゃここは死後の世界ってことか？」

「厳密に言つと違うが……お前たちからすれば、まあ間違っていない表現だな」

彼は目を閉じる。

見知らぬ学校。

異質な空気。

欠けた記憶。

『これから』の案内人。

にわかには信じ難いが、ここが死後の世界となるとこれらすべてに納得のいく説明がつく。

どの道、記憶が無いのだから疑っても時間の無駄だろう。

そう判断する。

「……わかった。それで、俺はこれからどうなるんだ？」

続きを促す彼の胸中は、何故か踊っていた。

よくある小説のような展開だからだろうか。

いわゆる『チート』という言葉でひとくくりにされる反則的な超能力の数々。

そういったものと過去の記憶を保持した状態で異世界へ転生し、数々の功績を上げ、美少女たちと出会い、親密になっていく。

これはそういった物語によくあるプロローグにそっくりだ。

生前に読んでいたであろう小説のタイトルはもちろん思い出せないが、そんな感じの物語をいくつも読んだような気がした。

「——なるほどな。そういった展開が望みなのか」

男がニヤリと笑う。

胸中を読まれた事に驚いたりはない。ここが死後の世界で、目の前の男が案内人——神か閻魔か——という存在である信憑性が増しただけだ。

「道理で適応力が高いわけだ。普通、自分が死んだ、なんて言われたら信じずに俺を誘拐犯か何かと勘違いして暴れ喚くか、信じてもしき返らせると無理難題を言っただけ暴れ喚くかのどちらかな。すんなりと信じたのはお前が初めてだ」

「記憶が無いんだ。生前の事に未練なんてあるわけないさ。それでどうなんだ？俺に反則的な能力を与えて異世界へ転生するというのはできるのか？できないのか？」

「……………もちろん、可能だ」

男は断言した。

「本当か!？」

「ああ。ただし、お前の言葉で言うところの『転生先の異世界』は選べない。そしてお前の言葉で言うところの『反則的な能力』を与えはするが、それでお前の望む展開になるかどうかは保障できない」

「十分だ!! ええと……………」

「俺に名前はない。好きに呼べばいい」

「じゃあ、ルシファーにしよう。ルシファー、ありがとう!」

彼のその言葉に、男——ルシファーは目を丸くする。

「お前面白いな」

ルシファーが指を鳴らすと、足元が淡く発光する。

魔法か何かだろうか? 種も仕掛けもない光に、また彼の心は高まつた。

「——そうだ。名前を付けてもらった礼に、俺からもお前に名前を贈ろう」

ふと、思い出したように告げる。

「え？いいよ、前の名前を覚えてくれれば」

「遠慮するな。新しい世界へ行くんだ。心機一転、名前も新しくしよう」

前もって決めていたのだろうか。ほとんど間を置かずルシファーは新たな名前を告げる。

「お前はこれからクロウだ」

「クロウ……いいね、なんかっこいい。気に入った！」

「よし、クロウ。新しい世界で存分に——」

ルシファーが言い終える前に、世界が暗転する。

そして、彼にとっての、長い、長い——本当に、長い物語が、幕を開ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451y/>

百戦錬磨の負け男

2011年11月19日20時29分発行